

赤十字新聞

The Red Cross Journal Japanese Red Cross Society publication

■編集・発行／日本赤十字社 企画広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL.03-3438-1311
一部20円 赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。

12 Dec 2010

Vol.847 http://www.jrc.or.jp

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）近衛忠輝会長が演説

ノーベル平和賞
受賞者世界サミット

歴代のノーベル平和賞受賞者が、世界が直面する諸問題について話し合う「ノーベル平和賞受賞者世界サミット」が11月12日から3日間、広島で開催されました。広島、長崎に原爆が投下されて65年にあたる今年は「広島島の遺産・核兵器のない世界」がテーマで、日本赤十字社の近衛忠輝社長も1963年に同賞を受賞した国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）の会長として出席、核兵器廃絶に向けた議論に参加しました。

核兵器のない世界へ
広島宣言を採択

同サミットは11回目、アジアでの開催は初。チャベツト仏教の最高指導者、ダライ・ラマ14世ら個人受賞者6人と受賞13団体が参加し、最終日には「核兵器を使用することとは人類に対する犯罪。今後一切禁止しなければならぬ」との広島宣言を採択しました。

開会式では、元広島平和記念資料館館長の高橋昭博さんが語り、

「（79歳）が語る生々しい被爆体験に、参加者は身を乗り出して聞き入りました。これに先立って、広島市立幟町小の児童約130人が登壇。同小の卒業生で原爆症により12歳で亡くなった佐々木禎子さんと折鶴の物語を紹介し、「アオギリの歌」を合唱しました。

ダライ・ラマ14世、デクラック元南アフリカ共和国大統領、エルバラダイ前国際原子力機関事務局長、北アイルランドの平和運動家マクワイアさん、ステルザン・国連事務次長補と並んでオープニングセッションに参加した近衛会長は「核の問題は極めて政治色が強いものです。しかし私たちが核の問題に正面から取り組み、人道主義を貫くよう各国に求めていくべき。人道の旗印のもと、今日から行動しましょう。そうすれば明日が見えてくるはずです」と世界へメッセージを送りました。

皇后陛下
アニメ映画
ジュノー
をご鑑賞

日本赤十字社名誉総裁の皇后陛下が11月9日、東京都写真美術館を訪問し、「ヒロシマの恩人」といわれたマルセル・ジュノー博士の生涯を描いたアニメ映画「ジュノー」を鑑賞されました。

赤十字国際委員会（ICRC）駐日首席代表として終戦直前に来日したジュノー博士は、15トンの医薬品を広島に届けるなど被爆者救済に奔走。自ら被爆地に入り、被爆者治療にもあたりました。映画は、広島を拠点に活動するNPO法人「モースト」が制作。日赤とICRCも制作に協力しました。今後、公共ホールなどで一般市民向けに上映される予定です。

海外たすけあい

義援金募集開始

世界の苦しんでいる人々を救いたい―その気持ちに義援金に託し支援へとつながっていく「海外たすけあい」が今年も、12月1日から始まりました。

海外たすけあいは、日本赤十字社とNHKの共催で昭和58年にスタート。これまで寄せられた義援金総額は200億円を超えています。紛争犠牲者や自然災害の被災者、貧困に苦しむ人々への支援などに使われてきました。



今年も地震や水



▲ミャンマーの民族衣装をホストファミリーに披露。ホストの大田さんは「気持ちが嬉しかった。感激しました」



▲シンガポールからの参加者は落ち着いた表情でプレゼンテーション



▶スリランカのメンバーは山口県・防府市立小野中学校で書道に挑戦。「難しかったけど、とても楽しかった！上手に書けたでしょ？」

24の国と地域から51人

青少年赤十字国際交流事業

アジア・太平洋地域の24の国・地域から赤十字活動に携わる若者たちを招いた「平成22年度青少年赤十字(JRC)国際交流事業」が11月12〜24日まで開催されました。

海外からのメンバー51人とスタッフは、国・地域ごとに22都道府県支部に分散。各地域のJRC加盟校を訪問しての授業体験や生徒との交流会、ホームステイを通じた異文化体験などを行いました。日程後半には日本各地からのJRC代表メンバー77人と、3泊4日の国際交流集會に参加。人道問題などについて討



異文化体験通じ、赤十字の意義を再確認

議しました。

この交流事業は、異なる文化や価値観の中で暮らす同世代の若者同士が一同に集い、議論を交わすことが特徴。お互いの立場を認め合った上で、人道問題に対して自分たちのできることや赤十字の存在意義などを探っていくのが狙いです。

交流集會のグループごとのディスカッションでは「同じ課題でも国によってその意味が異なっていると感じました」「この貴重な経験を私たちの活動に生かしたい」などの意見が発表されました。



▲タイから参加したジュンさんが札幌山の手高校の英語の授業で自己紹介。「タイ文字は難しいでしょう」



▲夕暮れにたたずむ鳥居の美しさに思わずハートのポーズをとるインドネシアのメンバー(世界遺産・広島県宮島にて)



▲「日本の匠の技に感動しました！」福島市「四季の里」でこけし作りを体験したフィリピンのメンバー

▲最後は静岡県御殿場にある研修施設に参加者、ボランティア、スタッフが勢ぞろい

ノーベル平和賞受賞者サミット

「核の問題に正面から取り組み、人道主義を貫こう」

国際赤十字・赤新月社連盟 近衛会長が訴え 発言要旨



核保有国やその可能性を持つ国は増えており、核拡散に歯止めが利かなくなる懸念が高まっています。

赤十字と核兵器との関わりは、広島に世界最初の原子爆弾が投下されたその瞬間から始まっています。広島赤十字病院は奇跡的に全壊をまぬがれ、大勢の負傷者が運び込まれました。投下から一カ月後、赤十字国際委員会のマルセル・ジュノー博士が外国人医師として初めて広島入りしました。

私たち赤十字は4年に1度開催される赤十字国際会議などの場で、核兵器禁止を支持する数多くの決議を採択してきました。一般市民の生命をいたずらに奪い、負傷させ、非軍事対象物に損害を与えるような、国際人道法に明らかに違反する兵器の存在を、これ以上見すごわけにいけません。私たちは核の問題に正面から取り組み、人道主義を貫くよう各国に求めていくべきです。

いかなる国、都市、地域社会においても、こうした悲劇を繰り返してはなりません。人道の旗印のもと、今日から行動しましょう。そうすれば明日が見えてくるはずです。

★ノーベル平和賞
スウェーデンの実業家アルフレッド・ノーベルの遺言で創設されたノーベル賞の一つです。国際平和の実現や人道活動、人権や貧困、環境問題などへの功績があった個人・団体に贈られます。

★赤十字とノーベル平和賞
1901年の第1回ノーベル平和賞受賞者が赤十字思想の生みの親であるアンリ・デュナンでした。赤十字国際委員会(ICRC)は戦時捕虜の保護活動の功績が認められて1917年に受賞。1944年と1963年にも同賞を受賞しています。国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)は災害や貧困、疾病などでの国際的な救援活動が評価され、1963年にICRCと並んで平和賞を受賞しました。

Our world. Your move.

赤十字150年



個人の尊重と赤十字運動 (最終回)

元IFRC財政委員 野々山 忠致

尊重することですから、それは自分だけではなく相手も人として尊重することを意味します。それを他人を

個人の尊重と社会の調和

「個人の尊重」(個人主義)が極端化して利己主義に繋がる危険性にどう対処するかという質問が読者からありました。「個人の尊重」をめぐっては社会の調和との関係がよく問題になります。この点について改めて考えてみたいと思います。

第一に、「個人の尊重」は、人を一人の人間として

書して省みない利己主義と混同して社会の調和を乱す要因だとするのは誤りです。最近、高齢者の存在不明や母親の育児放棄の問題を個人主義が蔓延したためだと非難する声がありましたが、個人主義の本質を誤解した議論です。個人主義は人の和を尊しとする日本

す。人道支援での「個人の尊重」とは、自分の都合で必要なら被災者の苦痛の軽減を第一に考えることだからです。

また、それは人道支援での国の役割を否定するものでもありません。災害の際には、国は被災者の救援に最も大きな責任を負って

の伝統的な思想に反するといい考え方も同じ誤解に基づくものです。

第二に、人道支援という助け合いの場で「個人の尊重」だ、権利などと言いつつ、自分勝手な行動が起き出す支援活動はできなくなるという議論も同じような誤解によるものです。

第三に、個人主義は、人がその個性を伸ばす上で不可欠であり、人が人として尊重される社会が成り立つための基礎です。夏目漱石は、『私の個人主義』という有名な講演で、「権力や金力に妨害されない個人の自由は個性の発展上極めて必要なものであって、それは貴方がたの幸福にも非常な関係を及ぼすから、個人の自由は自分でも保持(堅持)し、他人にも付与しなくてはならない」と言っています。チーム強化を託された或るアメフトのコーチは、まず選手一人ひとりが

ます。ただ、国は、人道支援では専ら被災者の苦しみとを和らげるために活動すべきで、それ以外の目的を優先させてはならないということです。

何が最善か考え全力でプレイすることがチームを強くするとしました。

また、歴史は、皆が同じような考えを持つ社会は極端に走りがちであることを私たちに教えています。因みに、岡崎満義『文藝春秋』元編集長は、共同体的な社会は、社会よりは、さまざまな価値観を持った人たちがお互いを尊重し「一匹狼の闘争」を許容する組織の方が断然面白いはずと書いています。

赤十字運動150年の発展を支えてきたのは、苦しんでいる人は敵であっても一人の人間として助けるという「個人の尊重」の理念とそれに対する先人たちのいかなる権威にも流されない確たる信念でした。そのことをお伝えしてこの連載を終えたいと思います。



高円宮妃殿下から銀色有功章(個人)を授与される泉さん(右)

日本赤十字社の活動は寄付で支えられていますが、その金額は減少傾向。そんな時代に、1通のダイレクトメール(DM)をきっかけに始めた寄付を10数年間にわたり継続

1通のDMが広げた赤十字の輪

銀色有功章受章 泉庄治さん

し、いま周囲にも寄付の輪を広げている人がいます。

10月27日に開催された和歌山県赤十字大会で銀色有功章を受章した泉庄治さんがその人です。平成4年から法人社

資への協力を始め、平成7年に株式会社果無の代表として金色有功章を受章。個人寄付も行っ

ていて、今回の受章へとつながりました。

DMが届いた当時、泉さ

は知り合いませんでした」と顔をほころばせます。

いま有社会役員として赤字を上げる活動も行っています。

「赤十字に寄付することは心を豊かにします。いわば『心の肥やし』です。そんな

思いが周りに伝わるとうれしいですね」と思いを語ります。

一方、日赤への期待については「地域の中での存在感を示して欲しい」と話します。

「奉仕団はありますが、女性中心で男は入りにくいんですよ」と笑います。

「地域社会は人と人とのつながりがどんどん薄れてい

ます。赤十字の音頭でコミュニケーション再生ができれば素晴らしいと思う。ボランティアが中心となるイベントの開催などを通じて、赤十字が草の根に広がれば、寄付も自然に増える」と期待しています。

生きる輝きを5・7・5にのせて いのちと献血俳句コンテスト 15作品が入選



入選者のみなさん



講評を語る審査委員長の黛まどかさん

俳句を通じて献血の輪を広げていこうと、日本赤十字社が開催した第5回「いのちと献血俳句コンテスト」の表彰式が11月13日、都内で開催されました。今年の応募総数は昨年より9万句増えて39万句と過去最高に。その中から15作品が各大臣賞、日本赤十字社長賞、最優秀賞、ピカチュウ賞などに選ばれました。

審査委員長を務めた俳人の黛まどかさんは講評で「いのちの大切さ、献血の大切さに向き合っている人は俳句を作られました。その作品は、いのちや献血の大切さを広く世の中に伝えていくことになると思います」とメッセージを送りました。

◆受賞作品(上位10作品)

厚生労働大臣賞・審査員特別賞

「どたとと 来てラグビー部 献血す」竹澤 聡さん

文部科学大臣賞・審査員特別賞

「亡き父の 席が空いてる お正月」田中 和泰さん

日本赤十字社 社長賞

「退院し 祖父は稲田に 真つ先に」後藤 のはらさん

ピカチュウ賞

「はかまいり 大きくなった ぼくをみて」仲野 泰輝さん

「パパのあせ おしごとした おいだね」千賀 優太さん

最優秀賞

(一般の部)

「コンバイン ひらりと降りて 献血へ」森山 勉さん

(高校生の部)

「ふくらんだ 母のお腹に 蝶とまる」山路 友梨菜さん

(中学生の部)

「運動会 ひときわめだつ 母の声」福本 大貴さん

(小学校高学年の部)

「献血の 父がおおきく みえる夏」大上 渥史さん

(小学校低学年の部)

「ういたういたおしりがういたおよげろぞ」山下 颯太さん

全受賞作品は<http://www.ken-tai-ku2010.jp/>をご覧ください。

春夏秋冬

赤十字病院物語

第2回 地域医療の再生をめざして

柏原赤十字病院(兵庫県)

柏原赤十字病院は兵庫県の中央部、丹波市(人口7万人)にあります。

明治30年(1897年)に開設された水上郡立柏原病院(後に柏原町立柏原病院)が、昭和10年(1935年)に日本赤十字社に移管。病床30床、職員25人の日本赤十字社兵庫支部柏原診療院(後に日本赤十字社柏原病院を経て、柏原赤十字病院に名称変更)としてスタートしました。以来75年、郡立病院から数えて113年の歴史を持っています。

戦後は国や県、地域との協力関係のもとで、郡国保連合会診療院として再整備。郡伝染病院も併設するなど、地域医療を守る総合病院としての機能を果たしてきました。

当院の約1キロ先にある県立柏原病院(県立結核療養所として戦後開設)とともに、長く地域の皆さんに安心と安全を提供してきたのですが、収益の悪化や、近年問題となっている勤務医減少によって、診療科目と病床数削減、時間外診療停止などが進み、一時は消滅が危惧されるほど病院機能が低下してしまいました。

同じ時期、県立柏原病院も大きく機能を低下させたため、丹波市の地域医療は壊滅寸前の事態に陥ったのです。

こうした危機的な状況のなか、全職員が一丸となって再建を進め、さらに

病院間の機能分担と連携を強めてきた結果、当院の病院機能は確実に回復しつつあります。昨年度は医師・看護師増員と増床に取り組み、前年度と比べて外来・入院ともに患者数が増加し、増収を果たしました。

今後も効率的な病院作りを進めるとともに、医師会や近隣病院との連携による質の高い医療サービスを提供し、地域医療再生に向けた努力を続けていきます。

(柏原赤十字病院院長 片山 覚)



防災訓練時の救護所で診察中の院長

柏原赤十字病院

兵庫県丹波市柏原町柏原 259
☎ 0795-72-0555

診療科目

内科／呼吸器内科／糖尿病内科／
消化器内科／脳神経外科／外科／
整形外科／眼科／小児科／婦人科／
歯科・口腔外科

常任理事会開催報告

平成22年11月19日、本社において平成22年度第7回の常任理事会が開催されました。審議結果は左記のとおりです。

付議事項

1 規則の改正について

(日本赤十字社職員給与要綱の一部改正)

2 借入金の上償還にかかる資金の借入及び予算の補正について

(釧路、北見、益田、三原赤十字病院)

3 医療機器整備にかかる予算の補正について

(京都第二赤十字病院)

4 職員住宅の解体にかかる不動産の処分について

(長浜赤十字病院)

審議の結果、規則の改正、借入金の上償還にかかる資金の借入及び予算の補正、医

療機器整備にかかる予算の補正、職員住宅の解体にかかる不動産の処分については、原案のとおり議決されました。

また、借入金の上償還にかかる釧路赤十字病院の資金の借入及び予算の補正については、原案のとおり理事会に付議することについて了承されました。

また、平成22年度NHK海外たすけあい、ハイチ共和国におけるコレラ流行に対する日本赤十字社の対応、予算の補正にかかる10月分の社長専決事項の決定状況について、それぞれ報告しました。

理事会審議報告

平成22年10月25日、理事会に文書による付議が行われました。

審議結果は左記のとおりで

決されました。

1 支部の不動産の処分について

(社屋移転新築に伴う埼玉支部の不動産の処分)

2 医療施設耐震化臨時特例交付金にかかる資金の借入について

(静岡、長浜及び庄原赤十字病院)

3 医療施設耐震化臨時特例交付金にかかる不動産の処分について

(浦河及び静岡赤十字病院)

今回の審議は、資金の借入及び不動産の処分の時期の関係から文書をもって理事会に諮られました。

諮られましたが、理事会の構成役員(社長、副社長及び理事)現員62人のうち、50人から回答が寄せられ、50人全員が賛成しましたので、平成22年11月5日付で原案のとおり議決されました。

付議事項

平成22年
海外たすけあい

生きる輝きを世界に広げるため いま私たちにできることがあります

日本赤十字社とNHKが共同で毎年実施している「海外たすけあい」。紛争や災害、貧困などで苦しむ世界の人々を支援するための義援金募集が今年も始まりました。募金の受け付けは12月1日から25日まで。あなたの善意をお寄せください。

たすけあいの心を
若い世代につなげたい

NHK視聴者事業局 事業部 井上 純司さん

テレビ放送開始30周年と国際赤十字創設120周年の記念事業として昭和58年2月にスタートした「海外たすけあい」。当時NHKには、海外救援にいっそうの働きかけを望む視聴者からの声が集まっていた。それを形にする事業として、日本赤十字社と手を携えて実施することになったものです。

毎年温かい気持ちが義援金となって届けられ、現在「海外たすけあい」は「歳末たすけあい」と並び、NHKが実施するキャンペーンの中核になっています。

最近「次の世代にたすけあいの心をつなぐ」という観点から、若い世代の方々にもっとたすけあいを身近に感じてもらう取り組みを進めてきました。今年はシンボルキャラクターにミュージシャンのMay J.さんを迎えてイメージソングを作ったり、秋葉原でコントを交えたイベントを開いたり、若者目線を大切にPRを行っています。

集まった義援金の使われ方を周知するのも私たちの大切な務めです。昨年は最終日のミニ番組ほか、テレビスポットなどによるお知らせが150回を超えました。伝えていくことの積み重ねを大切にしています。

日赤さんとは今後も情報を共有し合い、足並みを揃えて取り組みの発展に努めていきたいですね。



今年はアフリカでの保健衛生支援を重点に

田坂 治・日本赤十字社 事業局国際部長

毎年多くの皆さまに「海外たすけあい」をご支援いただき感謝申し上げます。さて、今年の「海外たすけあい」は、特にアフリカの保健衛生支援に重点を置きます。

アフリカはサッカーW杯南アフリカ大会が開かれ、著しく経済発展をしている地域ですが、一方で世界中で最も支援を必要としている地域です。

収入格差の激しい国が多く、人口の半分以上の人が1日1ドルくらいの、極貧生活を強いられています。しかもそうした困難な生活は、女性や子どもなど社会的弱者により多くしわ寄せされます。

これらの人々にわずかな習慣を身につけてもらうだけで生活は一変します。例えば、不衛生な環境で出産し、赤ちゃんを素手で取り上げるということも多くあります。このため日赤はウガンダで、出産する際に最低限必要な用品(タオルや脱脂綿、石けんなど)が入っている「ママバッグ」を配付する母子保健事業を実施しています。

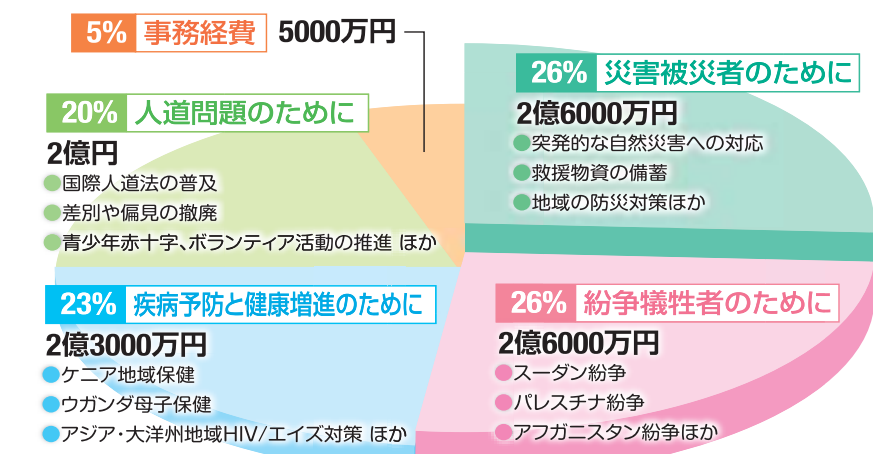
ケニアでは感染症を防ぐ保健衛生活動として、水の確保や、トイレ・手洗いなどの普及や指導にあたっています。

こうした活動は、現地にネットワークがある赤十字だからこそできることで、海外たすけあいに寄せられた義援金を大切にに使わせていただいています。

毎年実施されているこのような募金活動は、世界各国の赤十字社のなかでもめずらしいキャンペーンです。しかも28年間も続いているということは、日本の皆さんの温かい気持ちを象徴していることだと思えます。

アフリカでは、極めて困難な環境のなかであっても、私たちと同じように平和な生活を望む人たちが、一生懸命生きています。この現実を知っていただき、「海外たすけあい」にぜひご協力をお願いします。

平成22年度 海外たすけあい義援金による実施計画



対話集会には徒歩で1時間以上かけてやってくる妊婦もいます

30代の男性ボランティアは「地域社会に貢献できているのが実感できる」と活動の手応えを語ります。日赤は看護師を派遣し、こうしたボランティアを60人養成。各村々での対話集会などを行っ

「女性の地位が低いこの国での母子保健は、医療施設での出産を増やすだけでは不十分です」と国際婦人基金の代表は語ります。農作業、家事、育児のすべてが女性の肩にかかっている、十分な休養が取れないケースが多いから

対話集会を進めるボランティアには男性も多く、集会には妊婦の夫の姿も少なくありません。対話集会を通して、出産前後の女性の健康を守る社会づくりも支援事業の狙いの一つです。



ウガンダ母子保健支援 ママの健康守る社会をつくりたい

20年に及んだ内戦や貧困などによって、人々が十分な保健医療を受けられないアフリカ東部のウガンダ共和国。徒歩圏内に医療施設がないため、不衛生な環境で出産する

女性が多く、妊産婦死亡率は日本の100倍近い状況です。この国の母子保健を支援する事業も海外たすけあいが支えています。

最近、初めての子どもを産んだ若い母親は、ボランティアの働きかけもあつて保健所で出産しました。「保健所なので安心して産めました。これからは保健所を利用したい」と話します。

「地域への貢献を実感」ウガンダ北部アチオリ地域のムルムル。村の診療所で行われた「対話集会」には、近くの村から妊婦やその夫などが続々と集まってきました。



皆さまからの義援金で母子ケアに必要な出産用品をまとめたママバッグ(1セット約3000円)を6000人の妊婦に配付予定です

赤十字広報特使の藤原紀香です。毎年12月に行われている海外たすけあいキャンペーンは世界中で苦しむ人々を救うために、協力を呼びかけています。私も、これまでケニアやバングラデシュを訪れ日本赤十字社の国際救援活動に参加してきました。そこでは、苦しい環境の中、一生懸命「生きよう」としている人たちがいました。日本に暮らす私たちにとって、はるか遠い国の事と捉えがちですが、紛争・災害・不十分な保健衛生管理などによって世界中で多くの人たちが命を落としています。その現場で、赤十字は命を救う活動をしています。皆様から寄せられるこの義援金が、赤十字の活動を支え、多くの命を救います。活動へのご理解と、ご支援よろしくお願い申し上げます。



藤原 紀香

義援金の受付方法のご案内

- 全国の郵便局及びゆうちょ銀行直営店、銀行などの金融機関で振込で
- ナビダイヤルで0570-009595または、日本赤十字社 海外たすけあいキャンペーン係 TEL. 03-3437-7081
- NHK各放送局、最寄りの日本赤十字社の都道府県支部、病院、献血ルームで窓口で
- ホームページで日本赤十字社 www.jrc.or.jp 検索
- 携帯からはQRコードでアクセス

赤十字シンポジウム 2010

アフリカのママと子どもたち

「海外たすけあい」のスタートにあたり、日本赤十字社とNHKの共催によるシンポジウム「アフリカのママと子どもたち」が11月23日に都内で開催されました。同シンポジウムの模様は、NHK教育テレビ「TVシンポジウム」で12月4日(土)の午後4時から放映予定です。シンポジウムはアフリカ文化への造詣が深いアーティストの日比野克彦さんをコーディネーターに、明治学院大学の勝俣誠教授、モデルの森泉さん、アフリカ楽器演奏者のサカキマンゴーさん、日赤ケニア駐在員の五十嵐真希さんの4人がパネリストとして参加。拡大する貧富の差などアフリカの現状を踏まえた上での支援のあり方を議論しました。



12月4日(土) 午後4時～ NHK教育テレビで放映

スポーツと コラボ

マラソン大会で 臨時救護

福岡

10月31日に行われた「シテ
イマソン福岡2010」に
福岡県支部は日赤救護員を派
遣。医師、看護師など17人が
マラソン発着点で臨時の救護
所を開設しました。
ランナーはすり傷や打撲、



ヤフードーム内に設置
された救護所

気分不良などを訴え救護所を
訪れましたが、例年に比べる
と患者数は少なめで、重症の
方が運び込まれることもな
く、救護班は無事に任務を終
えました。

生涯スポーツの 祭典で救急救教室 富山

富山県内で開かれた第23回
全国スポーツレクリエーショ
ン祭「スポレクとやま201
0」の会場で、富山県支部は



0」の会場で、富山県支部は
救急救法の普及を目的とした
「赤十字イベント」World
First Aid Day 2010」を10月16、17日
の2日間にわたり開催しまし
た。
イベントにはボランティア
指導員やもしび奉仕団の団
員も参加。400人以上が救
急救法を体験したり健康チエ
ックを受けました。

イベントキャラクター「ぎとき
と君」も会場を盛り上げました

職場から献血の輪を広げよう

全国から企業・団体の 献血推進担当者 100人が集結

若年層献血の促進など献
血への協力を広げていくた
めの「平成22年度全国献血
(推進)担当者会議」が12
月5、6日の2日間、北海
道で開かれ、各都道府県か
ら企業・団体の献血推進担
当者約100人が参加しま
した。

千歳市には、献血された
血液から血漿分画製剤(医
薬品)を製造・供給する国
内で唯一の赤十字施設・血
漿分画センターがありま
す。会議に先立って参加者
は同センターを見学。広島



30万リットル、約150万人分の献血による血漿を
マイナス30℃の大冷凍庫で6カ月間保管

県から参加した自動車メー
カー・マツダ株式会社の貴
島さんは、機械化で管理さ
れた大冷凍庫(写真上)や
製造工程中のウイルス除去
処理などに触れ、「職員の
責任の大きさに感銘すると
ともに献血の重要性を再認
識した。今後も社内での献
血推進活動に力を注ぎたい
」と話されました。
札幌市内で行われた会議
では、小児がんで亡くなっ
た娘、幸美さんの名前を付
けた献血運搬車を日赤へ寄
付している岡本崇さん(和
歌山県・岡本殖産株式会社
会長)が「血の尊さ」をテ
ーマに講演。幸美さんの闘

もしもに備えて 訓練、そしてまた訓練

日ごろの努力がいのちと安全を守ります

災害時、持てる力を発揮す
るには日常の訓練が不可欠。
各県支部や奉仕団では、さ
ざまな状況を想定した訓練を
展開しています。

救護物資の海上輸送訓練を
行ったのは徳島県支部の船舶
奉仕団です。10月10日、小松
島港(小松島市)内に小型船
舶5隻が集結し、船舶間での
ロープ受け渡し訓練を行
いました。

大津波に備えた総合訓練を
行ったのは北海道支部です。
10月16日、釧路市をスノー会
場にした「大規模津波防災総
合訓練」(国土交通省主催)
に釧路赤十字病院救護班や釧

病を描いた映画「ゆきみ」
も上映されました。

上映後、幸美さんにRh
マイナスの血液を提供した
宮井修さん本人と、宮井さ
んを演じた俳優の風間トオ
ルさんが登場し、献血の大
切さについて思いを語りま
した。



全国から凍結されて運ば
れた献血血液を一本、一本
コンピューターに登録

奉仕団の主体的な訓練も各
地で行われています。石川県
のかほく市赤十字奉仕団は10
月8日、市内の公園で防災訓
練を実施。120人の団員が
テント設置や非常食の炊き出
し、心肺蘇生法の訓練を行
いました。
宮崎県では宮崎県災害時救
援赤十字奉仕団と宮崎市赤十
字奉仕団が10月16、17日の2
日間、宮崎県支部庁舎を会場
に野営訓練を実施しました。
32人が参加し、停電を想定し
た発電機の使用体験や、負傷



団員からは「訓練で学んだことを忘
れず精進したい」の決意も(徳島)

総勢1万人が参加し、津波被害の
軽減を目指しました(北海道)

託児つきで安心 の講習会開催 岡山

岡山県支部は今年度1回目
となる託児つき講習として、
10月9日と16日に幼児安全法
支援員養成講習を開催し、11
人の参加者から



0歳児から小学生までが集まった
託児室はあったかムード

2年前から始
めた託児つき講
習会。地域奉仕
団員や安全法奉
仕団員、岡山赤
十字病院院内保
育園の保育士ら
の協力を得て実

平成22年度青少年赤十字
(JRC)広島県大会が10月23
日、日本赤十字広島看護大学
(廿日市市)で開催され、JRC
加盟校の園児・児童・生徒や
教職員、赤十字奉仕団員など
約150人が参加しました。



大会の締めくくりに、参加者の
メッセージをつけた「友好の風
船」を空に放ちました

「2つの奉仕団が合同で訓練で
きたことはとても良かった」と
感想が(宮崎)



炊き出しには男性ボランティアも
活躍(茨城)



救護フロントには負傷者が続々と
運び込まれました(大阪)

かほく市赤十字奉仕団は毎年
防災訓練を実施して今年
で7回目(石川)

大会は今年で60回目。「広
島・韓国青少年赤十字相互交
流事業」に参加したメンバ
ーと赤十字のはじまり」を
演じ、参加者の喝采を浴びま
した。

心からの寄付に感謝

23台目の献血
運搬車寄贈 岐 阜

日興製菓株式会社(岐阜県羽島市)から10月22日、献血



目録を手渡す日置社長(左)

運搬車が寄贈されました。昭和59年より継続されている同社からの寄贈は今回で23台目。岐阜県で稼働する14台の献血運搬車のうち同社の寄贈が7台を占めています。

赤十字を学び、川募金活動を実践香
青少年赤十字(JRC)加盟校の高松市立古高松中学校の3年生6人からバキスタン洪水災害救援金が寄せられ、9月30日に香川県支部で手渡されました。



生徒たちは「学んだことを今後に生かしていきたい」と話しています

赤十字をテーマに選択した6人。世界の困っている人たちのために何かをしたいと考へ、街頭募金を行ったもので

室戸台風で甚大な被害を受けた地域。その際、赤十字の救援が行われたことから、現在もチャリティーバザーが毎年実施され、その収益金が赤十字に寄付されています。

地域の想いを 島
バザーにこめて 徳

月7日、チャリティーバザーの収益金21万1495円が徳島県支部に寄せられました。松茂町は、昭和36年の第2

奉仕団のモットーは「元気で仲良く！」



「赤十字のイメージは『生命の糸』。私たちの社会になくてはならないものです」
こう語るのは俳優の風間トオルさん。日本赤十字社が昨年制作した映画「ゆきみ」に出演し、その縁もあって今年11月に開催された全国献血(推進)団体担当者会議にゲストとして登場。いのちの尊さや献血の大切さについての思いを語りました。

「ゆきみ」は、35年前に小児がんを患い亡くなった3歳の女の子、岡本幸美さんと家族の物語。抗がん剤の副作用で輸血が必要になった幸美さんでしたが、血液型は数少ないRhマイナス。父親の崇さんの要請に応じて、自分の血液を提供する男性役を風間さんは演じました。

映画「ゆきみ」に出演
俳優

風間トオルさん
(48歳)

「この役を演じたことで、献血という行為を通じて、人と人との繋がりがいくことの大切さを実感しました」
演じたトラック運転手の男性は、幸美さんと血液型が一致していることを知り、快く献血を引き受けます。見ず知らずの他人にやさしくなるこうした人の存在に胸が熱くなったとも語



の子、岡本幸美さんと家族の物語。抗がん剤の副作用で輸血が必要になった幸美さんでしたが、血液型は数少ないRhマイナス。父親の崇さんの要請に応じて、自分の血液を提供する男性役を風間さんは演じました。

血の必要性を改めて考えました」と撮影を振り返ります。輸血を受ける前は、食べ物もどを通らず、顔面蒼白だった幸美さんでしたが、輸血すると顔色が良くなったといいます。「収録時には岡本崇さんのお話も伺うことができたが、献血という行為を通じて、人と人との繋がりがいくことの大切さを実感しました」

出合いを大切に成長したい

ります。
「輸血を必要としている患者さんのいのちを支えているのが献血です。僕もそうですが、若い世代がもっと献血に参加することが大切です」
モデルから俳優となつて今年で21年目。トレンディー俳優としてスタートし、映画、舞台へと活躍の場を広げました。一つひとつの作品や共演者、スタッフとの出合いが俳優としての風間さんを成長させてきたといいます。

Voice&プレゼント

◆乗り物とのコラボ企画に期待

——匿名希望(成田市)

ダブル記念で江ノ電とコラボ献血のPRの記事を読み、とてもステキな企画だと思いました。私が住んでいる千葉県にもたくさんの乗り物があります。このような企画をぜひ我が県でも採用してほしいと思いました。



プレゼント応募方法

「赤十字新聞」や赤十字活動へのご意見や感想などを下記までお寄せください。毎月抽選で素敵な赤十字グッズをプレゼントします。

☆今月号のプレゼント

「クローズアップひと」でも紹介されている映画「ゆきみ」のDVDに、風間トオルさんのサインを入れて5名様に。



- 郵送/〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社企画広報室 赤十字新聞係
- FAX/03-3437-7091
- メール/koho@jrc.or.jp (件名「赤十字新聞12月号プレゼント応募」)
- 応募締切/12月24日(金) 必着
- ★ご投稿の際は、お名前、連絡先(住所・電話番号)を明記してください。匿名希望の際は、その旨もご記入ください。当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。



主演の森

http://sonomachi.comをご覧ください。

その街の子ども
映画案内
震災の傷に向き合い、
未来の希望を語る
劇場版

震災が残した心の傷に向き合おうとする若者の姿を、ド

キュメンタリータッチで描いた作品。阪神・淡路大震災から15年の2

作品は2011年1月15日より東京都写真美術館ホール池袋シネマ・ロサほかで全国ロードショー。関西地区ではシネ・リール神戸ほかで先行上映中です。配給収入の一部は災害救済活動のため日本赤十字社に寄付されます。

山未来と佐藤江梨子のふたりはそれぞれ小学4年、中学1年の時に神戸市内の自宅で震災を体験。リアリティーのある演技やせりふも話題になりました。

今年のはバザーは、9月25、26日に行われた「スカイフェスタ松茂」の会場内で開催。準備を含め、延べ1100人の奉仕団員が参加しました。

瞳のために寄付
品川近視クリニック
品川近視クリニック(東京都千代田区)から、日本赤十字社の視覚障害者情報提供施設(北海道支部点字図書セン



感謝状を受け取る綿引院長(左)

12月の行事予定

開催日	行事名	開催場所	問い合わせ先・備考
12月1日(水)~1月6日(木) ※休館日 12月29日(水)~1月3日(月)	写真展 「HUMANITY IN WAR」	JICA横浜ギャラリー(横浜市)	入場無料・神奈川県支部 ☎045-681-2123
12月18日(土)・19日(日) 10:30/12:30/14:30/16:30	アニメ「ジュノー」上映会	JICA横浜体育館(横浜市)	入場無料・各回とも上映30分前から会場にて整理券配布(定員200名) 神奈川県支部 ☎045-681-2123

「人道支援シンポジウム」(ICRC、外務省共催)

100%の安全はない。それでも赤十字は人道支援を行う 紛争地支援の安全確保めぐり議論

「人道スペース」という聞き慣れない言葉が、紛争下の人道支援からんでクローズアップされています。11月5日には赤十字国際委員会(ICRC)と外務省の共催でこの問題を考えるシンポジウムも開かれました。「人道スペース」とは何か。なぜ注目が集まっているのか。シンポジウムの発言からまとめてみました。

Q 人道スペースってどんな意味？

A 人道支援活動が安全に実施できる地域環境を意味する言葉です。ICRCクアラルンプール地域代表部のトビマス・エブレヒト首席代表は「それぞれの組織によって定義は異なる」と前置きした上で、次のように語りました。「援助を必要とする人々のもとへ駆けつけて安全に活動を行うための環境。簡単に与えられたり取り上げられたりできる性質のものではない」

支援が紛争当事者から妨害されたり、スタッフが攻撃される事件がたびたび発生する中において、「人道スペースの確保は大きな課



© ICRC/GUTMAN, Amnon

紛争下の検問所通過で安全が確保された例

題。効果的支援を行うために不可欠」(外務省)との認識が国際的に広がっています。

Q どうすれば人道スペースは守られるの？

A エブレヒト氏は「すべての紛争当事者に我々の存在が受け入れられてこそ、人道スペースは守られる」と強調。そのためには「人道活動への理解を紛争当事者との対話を通じて広げていくことが重要」と、赤十字の立場を説明しました。

「紛争が続いている中であっても住民や非戦闘員のいのちと安全は守られなければならない、という人道のルールと併せて、そのルールに則ってICRCが活動している、ということ、紛争当事者に分かってもらうことが大切です。」

NPO法人ピースウィンズ・ジャパンの山本理夏氏も「支援を必要な人に届けるには、当事者からの中立性を保つこと。住民と話し合いながら支援を進めていき、信頼を得ることが大切」と指摘しました。

Q 軍事力で人道スペースを確保することもありうるの？

A 人道スペースの確保が軍の協力を得て実施されている現実には確かにあります。国連難民高等弁務官事務所駐日代表のヨハン・セルス氏は、部族間での大量虐殺が行われたルワ



ンダを例に「軍隊に頼るしか選択の余地がないケースもある」との認識を示しました。



一方、国連人道問題調整部アフガニスタン事務所長のティモシー・ピット氏からは「人道支援が政治・軍事活動の一環と見られてしまい、住民に支援を届けるのが困難になってきている」との現状が報告されました。

ICRC南アジア事業局長のジャック・ド・マイオ氏も「人道スペース確保に軍や武装集団の協力を仰ぐことで、人道支援が政治的思惑に利用されてしまう危険がある」と注意を喚起しました。

Q 治安が悪化した中では丸腰で大丈夫？

A マイオ氏が強調したのは「最大限の安全を確保することは大切だが100%はありえない。丸腰で活動することにリスクは常にある」ということです。

世界の紛争地でICRCは人道支援を実施していますが、その活動が地元の人々から支持されるよう努力してこそ「人道スペース」が確保できることをマイオ氏は訴えました。

シンポジウムではアフガニスタン支援をめぐっての議論も行われました。その中でマイオ氏が述べた「支援する側の安全問題だけでなく、住民の安全についてこそ私たちは語るべきではないだろうか」という言葉は、人道スペースを考える上で大切な視点を提供しているかもしれません。

インドネシア

HIV/エイズ対策支援事業終了へ 予防・ケアに立ち上がった陽性者

「正しい知識の普及は進んできました。今後はそれを陽性者支援と感染予防の行動へつなげていくことが課題です」。こう語るのは、日本赤十字社の駐在員としてインドネシアの北スマトラ州に派遣されている代田香苗さん。日赤では、インドネシア赤十字社が実施するHIV/エイズ対策事業への支援を2005年から行ってきました。今年12月末で終了する事業の成果と課題について現地よりご報告します。

予防啓発へボランティア養成

毎年12月1日は「世界エイズデー」。インドネシアの北スマトラでもボランティアやHIV陽性者らによるキャンペーンが繰り広げられます。「ポスター作成などに一緒に取り組むことで、ボランティアに一体感が生まれるようです」と代田さんは語ります。

支援事業は、①HIV/エイズ教育②HIV陽性者ケア③差別と偏見の軽減——の3つを柱に取り組んできました。いずれも活動の主体はボランティアです。

HIV/エイズの知識を普及するボランティアを、学生や主婦、性産業従事者、行政職員などの中で養成してきました。友だちや近所の方など身近な人が伝えるので、知識の普及に大きな効果が期待できます」。代田さんはボランティアの意義を強調します。

活動には陽性者も参加。経験談を伝えることで、地域の人々が陽性者やHIV/エイズへの見方を変えていきます。



正しい予防知識は人から人へ

3万人の力に期待

HIV感染拡大が指摘されているインドネシアですが、人々のこの問題への危機感は希薄。その一方で、陽性者への偏見や差別は深刻でした。エイズで亡くなった夫から感染した女性は、周囲の冷たい態度で、地域に住めなくなりました。

背景はHIV/エイズに対する間違った知識です。「治療手段はなく、すぐ死ぬ」という誤解などによって、検査や治療の機会を逃してしまう人もいました。

そこで事業では、陽性者や家族に治療などの情報を提供し、健康管理の重要性を伝えてきました。また、在宅や入院中の陽性者には、元気な陽性者ボランティアが訪問。健康管理の手伝いや悩みの相談相手になってきました。代田さんは「陽性者自らがHIV/エイズ活動に参加し、社会を変えていくことが大切」と訴えます。

しかし、多くの人々の行動を変えるには時間がかかります。「例えば、性行為から感染を防ぐためにコンドーム使用を勧めてきましたが、十分に普及しているとは言い難い」と代田さん。「3年間で育ててきた約3万人のボランティアたちを中心に、感染予防の習慣が根付くことを期待しています」

ガボン共和国大統領夫人が 日赤乳児院を訪問

こどもたちと笑顔の交流

ガボン共和国赤十字社名誉総裁を務めるシルビア・ボンゴ・オンディンバ大統領夫人が10月28日、日本赤十字社医療センター附属乳児院にて近衛日赤社長を表敬訪問。施設の視察とともに、こどもたちとの交流を行いました。

日本の乳児院の多くは病気になったこどもの入所が困難ですが、同乳児院は病院と隣接しているために受け入れが可能です。現在、入所している68人のこどもの半数近くが何らかの病気を抱えています。

同乳児院のこうした状況について、今田義夫院長が説明。シルビア夫人は「ガボン赤十字社が学ぶべき点が沢山あります。ぜひ、日赤の方にガボン赤十字社の事業もお手伝いしてもらいたい」と訴えました。



シルビア夫人は乳児院のすべての部屋を訪れ、こどもたち一人ひとりと触れ合いました

大自然と資源に恵まれたガボン共和国

大西洋に面したアフリカ中部の国。石油などの資源に恵まれ、アフリカの中では国民所得が高い。1953年にノーベル平和賞を受賞したアルベルト・シュバイツァー博士が同国で活動していたことでも知られています。

インドネシア赤十字社のHIV/エイズ関連トレーニング講師と代田駐在員(左)

